

2008年夏学期レポート

谷口 恵美

【はじめに】

ギャロデット大学での生活も6月の中旬で終わり、7月中旬から私の留学の最後の課題である南アフリカのろう学校での教育実習が待ち抱えていた。ここ南アフリカは南半球に位置しており、季節も日本やアメリカと当然逆となり今の季節は冬である。しかし、私が滞在してる首都プレトリアは雪がなく気温も秋並みで穏やかな気候のため、現地人から「今は冬の真っ最中だよ」と言われてもなかなか感じないものである。その大自然の息吹を感じる南アフリカの空気が非常に美しく、これまでのストレスが解消し血のめぐりも良くなり体調も快方に向かうことが出来た。そこで、南アフリカのろう学校で得た経験と美しい大自然を持つこの国の探訪体験を下にて記載しておきたい。

【研修】

当初、夏休み期間にガボンというアフリカ中部の国で約1ヶ月程教育実習をする予定だったため、予防注射やビザの習得など全て済ませ、準備万全だったが、詳細には分からないが現地で何やら問題が発生したためにガボン行きを断念せざるを得なくなった。その中止というお知らせを聞いた瞬間に夢が崩れたような感じに覆われ、ただ呆然とするしかなかった。しかし、ガボン行き飛行機に乗り換えるための南アフリカ共和国への航空券はキャンセル出来なかったために南アフリカに8月上旬まで滞在することに決定した。アフリカ大陸に足を踏み入れるのは人生初であり、南アフリカと言えば「大自然の大国」をイメージする人も多いと思うが、まさにそうだと感じる位自然のあふれる国だと実感できる程サファリも多く、市民たちの動物愛護を心がけている雰囲気があった。動物を飼っていることが当然のように現地人は語っていた。



(首都の風景)



(首都から 20km 先の湖)

南アフリカに到着して1週間後に教育実習先を探し始め、結果として2つのろう学校が候補として挙げられた。他にケープタウンで2011年のWFDのデザインのお手伝いとその近くにあるろう学校からの訪問歓迎の依頼が来た。考えた末、7月15日から首都プレトリアの聾学校で教育実習をすることが決まった。ガボンでの実習がキャンセルになり残念だが、南アフリカで実習先が見つかりその期待に大変胸を躍らせた。

その7月15日に南アフリカの首都プレトリアにあるろう学校を初めて訪問した。訪れた瞬間、そのろう学校の生徒たちはこれまでアジア人ろう者を生の目で見たことが無く、「アジア人だ!!」と校内で騒がれてしまったり、「日本はどこにあるの?」などと質問攻めにされたりしたことが始まりだった。

ここ約1ヶ月間、色々な授業の見学や生徒たちとの触れ合い、そして多くの先生方と教育のあり方や問題などについて議論したりしてきた。そのろう学校には手話通訳者が3名おり、手話の出来ない先生の授業や校長先生のお話などの時に通訳するというシステムがある。その制度は初めて聞くものであり、好奇心のゆえに授業を見学させてもらった。その通訳制度は生徒たちの意見を基に2002年に設立されたという。また、手話の技術を更に磨きたい生徒たちや先生たちのための手話クラスが設けられており、そのクラスはろう者たちの要望により約2年前に始められ、現在はコンピューターを用いた授業を行っている。南アフリカには11言語という多言語を持つ国で、手話もそれぞれの言語によって当然異なるために南アフリカ手話を1つにしようという動きにより、生徒たちはコンピューターで新手話を学んでいる。このことから、そのろう学校でも最近手話の重要さが高まってきている模様である。

このろう学校では、幼稚部・小学部・中学部・高等部・専攻科があるが、高等部に進学する前に試験があり、それに合格した生徒は高等部に進学し、不合格となった生徒は専攻科に行き生徒たちの持っている技術を更に磨くという訓練を行うことになる。その専攻科の家庭の授業も見学させて頂いたが、その先生からのお話によると、健常者の社会の中でいかにスキルを伸ばすかという体験をさせるために県内の飲食店での教育実習も行われているそうだ。その環境の中で忍耐力とコミュニケーション能力を身につけることができ、それが自信につながるというプラス面がかなり大きいのではないかと思う。



(スキルレベル1のクラス：料理の実習) (生徒の作品を大学が評価した成績表)

次は言語についてだが、日本のろう学校のほとんどの生徒は日本語を言語としているが、このろう学校では、先述したように多言語をもつ国であるため英語を言語とする生徒だけでなくアフリカンスを言語とする生徒や他の言語を話す生徒たち様々であり、先生の生徒への指導も倍以上大変な様子が度々伺えた。アフリカンスとはドイツとオランダ語系の言語であり、南アフリカに居住しているオランダ系白人が使用している。このろう学校では写真をご覧の通り黒人と白人の生徒と一緒に授業を受けている。そういう環境から小学部からすでに第2言語としてのアフリカンス(または英語)を指導するというカリキュラムが組み込まれている。しかし、2つの言語のスキルに達しておらず、言語に壁を感じている生徒たちも少なくは無いという。そこがバイリンガル教育の難点だと私は思っている。上手くバイリンガル教育を行っていけば2言語の能力も伸びるが、失敗をすれば2つとも習得出来なくなる。そこがバイリンガル教育の怖い所ではないかと思う。



(幼稚部：今はお昼休み中)

(小学部：算数の授業)

このろう学校には交通や金銭面の関係で通学出来ない生徒たちのための寮があり、幼稚部から高等部それぞれに分けられている。親が来られない幼稚部の生徒のために高等部のお兄さん・お姉さんが週末を使って世話をすることが日課にな

っている。しかし現実としては、中には貧しくて親が寮代を支払えないことも珍しくは無く、学校が立替として払っているという事情がある。

先月の生活記録にも記載したアパートヘイトの廃止を実施したかの有名なマンデラ前大統領の90歳誕生日が7月18日に迎えられ、昼休みに変装した偽のマンデラ氏が登場し、生徒たちが歌で彼を祝い、最後にケーキを食べながら楽しんでいた光景を見て微笑ましく思った。また、市民たちも外で賑わっており、マンデラ氏は市民の皆から尊敬とともに愛されている存在だとこの国で実感することが出来て良かった。



(偽マンデラ氏が登場した時の生徒たちの様子)

【南アフリカ探訪】

■ ソウェト地区 ■

南アフリカに世界で最も犯罪発生率が高く危険な地域と呼ばれている旧黒人居住地区「ソウェト」があるが、友人たちと一緒に行くことはあまりお勧め出来ず、現地旅行会社の主催するツアーに参加するのが望ましいということで、友人とそれに参加することにした。

ソウェトに行く間に、ニューヨーク並みの高いビルがそびえており、ショッピングモールやホテルなども一流であるヨハネスブルグ市の風景をを車から眺め、まるでニューヨークにいるような感じだったが、通り過ぎ南東部の方に行くと先ほどの雰囲気とは全く逆で殺風景な空気が車の中に漂って来ており、説明できないほど貧しい家がぎっしりと並んでいた。それらの家々の中にはトイレと風呂がなく、トイレは外で、井戸の近くで井戸水を使用した共同風呂があり、住民たちと共用しているという。

その地区に入る途端に道路で黒人の子どもたちが「お金！お金！」「食べ物！食べ物！」と叫びながら一気に寄ってきており、その光景は人生で初めて見たものだった。近くにホットドッグが売っていて、そこでランチタイムを楽しんだが、予想通り子どもたちが潤んだ目を輝かせながら私の方に近寄ってきた。その目に押され、ドッグをあげようとした瞬間その子どもはそれを奪い、遠くの方に走っていった。しばらく観察してみると、その奪った子どもは他の子どもたちを呼び、

そのドッグを分けて楽しく食べていた。私はその光景に「世界中には貧しくてホットドッグさえ買えない子どもも数え切れないほど多く存在するのだ」と教えられたような感じに覆われた。そして、ようやく手にいれたドッグを自分で全部食べるのではなく、他の子どもたちにも分けてあげようという優しさに胸を打たれた。その地区で知った凄まじい貧困問題は一生決して忘れさえない。

また、世界中を震わせた事件でもある「ソウェト蜂起」でアパルトヘイト政策で白人の支配と見なす黒人の少年たちがデモを起こし、警察に撃たれ13歳の若さで亡くなったヘクターという少年の記念館を訪問し、ガイドさんによるソウェト蜂起の出来事の流れを聞いた。ソウェトはアパルトヘイトの廃止を実施したかの有名なマンデラ前大統領の故郷でもあり、そこに博物館があったがあいにく休館で残念だった。



(ソウェト地区)



(ヘクター氏の記念館)

■ サファリ ■

日本人の友達が1週間ながらに南アフリカに遊びに来てくれ、世界で最も有名なサファリの1つであるクルーガー国立公園で2泊3日過ごした。その公園は日本の四国が収まるほどの面積を有しており、このサファリは基本的に自分で野生動物観察するもので、それを「ゲームドライブ」と呼ぶ。自分でドライブをし、動物などを見つけていく。特にライオンに遭遇する確率が低く、運と勘次第のようだ。早朝の5時にビッグファイブ(ライオン・ヒョウ・ゾウ・サイ・バッファロー)を探しにドライブに出かけたが、ライオンとヒョウは残念ながら遭遇することは出来なかった。現地人いわく、ライオンは狩りのために早朝ではなく夕方から夜にかけて出没するそうだ。知識のなさで計画を誤ってしまったことに後悔したが、南アフリカでしか見れない動物を沢山見ることが出来、さらにキリンやゾウなども間近で見れたことも貴重な思い出となった。いつかはリベンジとして再度サファリを訪れたいと思っている。



【最後に/抱負】

大自然に恵まれ大変魅力のある国との別れはことさら名残惜しい。アメリカに戻り最後の仕度を終え、そして久しぶりの母国である日本に帰国した私は、現在大学に復学した。日本は漢字だらけの世界であり、そして日本の文化に慣れるのも一苦労するが、ここ2年間学んだ数え切れない多くの経験と異文化ショックで培った精神力を心の糧とし、留学の成果をわが国日本で発揮していけるよう頑張っていきたい。